

美術科教育学会通信 No.32

1999年3月10日発行

学会事務局 〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部 美術教育学研究室

TEL: 0734-57-7359,7358 (長谷川・永守研直通) FAX: 0734-57-7509,7508 (同)

通信担当 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 TEL&FAX: 0742-27-9223 (宇田研直通)

第21回美術科教育学会 福島大会

ごあいさつ

福島大会実行委員長 熊田喜宣

第21回美術科教育学会福島大会まで数週間と迫りました。

実行委員会を代表いたしまして、一言述べさせていただきます。

私たち福島大学教育学部美術科は、「開催地区が得するように、現場に開かれた学会にする」ことを目指して、学会の開催をお引き受けいたしました。従いまして、福島では、小・中・高校の教師を含めて実行委員会を結成し、大会を作り上げてゆく中で本県の美術教育を下支えするネットワークづくりを大きな目標といたしました。

ご承知の通り、現在、美術教育は内側も外側もかつてない危機に瀕しており、21世紀を目前にした今、大きなしきり直しを迫られております。実践に裏打ちされない理論の上空飛行や、過去を顧みりだけの経験主義は厳しく批判されなければなりません。教育現場と研究者が一体となって理論と実践の創造に立ち会わなければならない、その必要感が今ほど強く感じられるときはありません。

わが美術科は、過去数年の内に、本学会の理事であった佐久間敬教授、そして会員でもあった白沢菊夫教授の尊い二人の同僚を

失いました。常に現場に身をさらし、批判を仰ぎながら、現場教師とともに理論・実践を構築されることを常として生きたお二人の意志を受け継ぐためにも、必要な開催方法と考えたのです。

本学会に課せられた課題は、中教審答申、教課審答申、そして新学習指導要領によって示された21世紀の公教育の設計図を、専門的立場から検討し、より確かなものにしてゆくことと考えております。

そのためにもここ四半世紀の美術教育の総括を行いながら、教科教育学の原点に立ち返って、再生・再構築すること、これを「リアリティ」という言葉に託しました。

権威と伝統ある本学会の開催をお引き受けすること、そしてこうした課題に立ち向かうには、あまりに若く微力なスタッフですが、これまで懸命に取り組んで参ったつもりです。数年の後、本県で「あの美術科教育学会でできたつながりが実を結んだ」ということばが、どこからか聞こえてくるような、夢を思い描いております。

どうか、早春の福島へおいでください。実行委員一同、諸先生方のお越しを心よりお待ちしております。



第21回美術科教育学会 福島大会へのおさそい

福島大会事務局

第21回美術科教育学会まで数週間と迫りました。福島大会のみどころをいくつかご紹介いたします。

1. アクセスが容易

福島大学は築20年の建物で、福島市から15kmほど南へ下った、大自然の中の金谷川団地にあります。東北本線福島駅から二つ目の金谷川駅を降りると、目の前に白亜のキャンパスがそびえ立ちます。徒歩10分ほどです。今年は春の訪れが早く、今からぼかぼか陽気です。

2. 移動が容易

学会の口頭発表と全体会はほぼ一棟の中で行われます。雨が降って濡れることも、キャンパスの中を迷うこともありません。広い控え室に、インフォメーションコーナーも準備しました。

3. 61本の豊富な口頭発表

昨年の大阪大会の72本に勝るとも劣らない充実ぶり。内容は多彩で、意欲的な研究ばかりです。発表会場は広く、快適です。

4. 美術教育の本質をえぐる リレートーク

冒頭は「美術教育のリアリティの再生」と題したリレートークで本大会の幕が開きます。「自己表出が世界をひらくために何が必要か」というテーマで社会哲学の中西新太郎先生 横浜市立大学、「表現の息づく学校のイメージ」というテーマで教育方法学の佐藤広和先生 三重大学、そして「美学・美術史からの

アプローチ」というテーマで本学会理事の長田謙一先生 千葉大学、と、全く異なる視点から美術教育へのアプローチがなされます。美術教育の今日的な課題や役割が明確になることと思います。

5. 美術教育新時代を開く講演会

認知心理学の宮崎清孝先生 早稲田大学・人間科学部の「リアリティの探索としての美術表現 認知科学からのアプローチ」と題した講演会です。今日話題となっている認知科学のフィールドから、表現と学びをブリッジさせようとする試みです。講師の宮崎先生は、図画工作の実践現場に密着しながら、ギブソンのアフォーダンス知覚理論やグッドマンによるシンボルシステムなどの最先端の理論を駆使して、子どもたちの認識や生活と表現の関係を明らかにしています。美術教育の新しい扉がまたひとつ開かれることと思います。

6. 若き研究者が集う WEの会懇親会

東西の院生を中心とした交流会です。情報の交換や他大学の先生との交流もできます。明日からの英気を養うようごちそうをたっぷり準備しました。

7. 福島の水と空気を 満喫できる学会懇親会

福島は日本有数の酒どころ。地酒はもちろん、地元の太鼓や踊りを予定しています。会場は、福島駅を降りて正面。

8. 最新情報はホームページで

http://www2.educ.fukushima-u.ac.jp/~miura/bijutuka/bijutu_home.html に最新情報を掲示しておきます。プレ学会の中西新太郎先生の講演全文、福島大学へのアクセスや飛行機・電車の時刻表まで掲示されています。是非一度のぞいてみてください。

平成10年度文部省科学研究費 補助金採択課題本学会関連一覧

宇田秀士（奈良教育大学）

本年度の学会関連、学会員による科研採択課題（研究代表者、テーマ、配分金額）をお知らせいたします。事務局に寄せられた情報並びに以下の文献を参考にして作成しました。

科学研究費研究会編『平成10年度文部省科学研究費補助金採択課題・公募審査要覧(上)、(下)』ぎょうせい、1998年9月

<研究成果公開促進費>

学術定期刊行物

- *『美術教育学 - 美術科教育学会誌』第20号、59万円

学術図書

- *金子一夫『近代日本美術教育の研究』中央公論美術出版、240万円
- *田中まさ子『幼児教育方法史研究』風間書房、190万円

<基盤研究(A)>

継続分

- *花篤実：メディア教育・異文化理解教育としての美術教育・映像教材およびガイドラインの開発、410万円

<基盤研究(C)>

新規分

- *増田金吾：児童画に関する比較研究 - 日本(北海道)と英国(北アイルランド)の場合 - 210万円
- *福田隆真：表現教育の可能性としての芸術と情報のカリキュラム研究、250万円
- 継続分
- *新井哲夫：造形活動における子どもの発達の特性をふまえた鑑賞教育の方法論に関する研究、90万円
- *宮坂元裕：各教科における学習課題の成立過程の比較及び教科間の関連に関する研究、110万円

- *山田一美：教員養成系学部・大学院における教師教育のための美術教育実践の研究、70万円

- *藤江充：DBAEの課題とその意義に関する研究、40万円

- *福本謹一：造形体験を促進する学習ソフトウェアの開発、100万円

<萌芽的研究>

新規分

- *石川誠：地域の美術館利用を媒介にして、小・中学校の連続性を図る鑑賞教育の試行、100万円

継続分

- *上野行一：児童・生徒の造形的な「みたて」能力の調査と「みたて」の造形教材および指導法の開発、60万円

<奨励研究(A)>

新規分

- *本村健太：マルチメディア時代のバウハウスとメディアリテラシー教育の研究、60万円
- *直江俊雄：リチャードソンの教育方法に基づいた視覚的表現の多様性に関する研究、150万円

- *宇田秀士：近代日本美術教育における《中央の制度・政策決定》と《地方教育現場での摂取・定着》、180万円

- *三根和浪：小学校美術鑑賞における教材提示メディア及び教材配列の適正化に関する研究、180万円

継続分

- *佐々木宰：初等教育における表現教育と情報教育の総合的学習形態に関する研究、90万円
- *石崎和宏：美的感受性の発達と美術学習の適時性に関する実証的研究、80万円
- *栗田真司：プロトコル分析による描画表現意欲の低下児童に関する基礎的研究、50万円

<奨励研究(B)>

新規分

- *静屋智：鑑賞の学習を通して、子どもの美学

を採る、24万円

*中堂元文：多様なメディア環境を受容した美術教育の可能性の探究、24万円

科研採択状況を集約する過程で、前掲書の「教科教育学分野」の課題名を一通り見ましたが、次のようなことを感じました。

(1)現職の先生方の応募分野である<奨励研究(B)>を中心にして、学会会員以外で、美術教育に関連したテーマと考えられる研究が多数ある。

本学会員でなくても、意欲的な実践・研究を行っている方がいることは、当然のことだが、生活科や総合学習、癒しに関連した研究でも、ものづくりや描画活動をテーマとしているものがあつた。

(2)上記の1にも関わるが、マルチメディア時代を反映して、教育方法学、教育実践学などの研究者のテーマの中で、興味深いものもある。

例えば、「マルチメディア作品制作を支援する総合学習カリキュラムの開発と評価」「マルチメディア教育実践の評価研究～メタファア調査と作品分析を中心に～」等。

3月1日には、高等学校、盲・ろう・養護学校の学習指導要領案が発表されるなど、進行中の教育改革の中で、教科再編・統合の構想も色濃く出てきていますが、上記の1,2とも、美術教育の可能性、現代性を示唆しているように思いました。いかがでしょうか。

さて、本学会関連の研究に話を戻しますと、継続分に関しては、報告書が近々出る研究もあります。それぞれが魅力的なテーマ設定で、はたしてどんな成果が生まれてくるか、楽しみなところですよ。

また、今回、漏れていた研究がありましたら、事務局(宇田)までお知らせ下さい。次号に掲載いたします。その他、ユニークなプロジェクト、企画を行っている会員からの紹介もお持ちしております。

総務会からの報告と、議論の基調

長谷川哲哉(和歌山大学)

さる2月21日(日)午後1時から5時まで、学会の総務会が、大阪市の大阪教育大学天王寺キャンパスにおいて開かれました。

総務会は、花篤實代表理事、宮脇理前代表理事、柴田和豊副代表理事、長谷川(副代表理事、事務局代表)と連合事務局メンバーとで構成されています。

全員の理事と監査が一同に集まる役員会が、8月末と3月学会時の年2回開催となっているため、その役員会への原案提出や緊急な課題に対処するために宮脇代表理事時代に創設されました。新しい体制になっても、この総務会を継続していくことと、構成メンバーについては、昨年8月開催の役員会で承認されています。

学会入会申し込みの取扱い、今期学会活動の基本方針と企画、福島大会での理事会と総会での議題・報告事項、情報ネットワークの整備、学会通信、会計報告、などについて検討されました。その成果は3月26日(金)の学会初日に行われる役員会にて、提案・検討され、3月28日(日)の学会総会で全会員に示されることとなります。

さて、総務会での議論の基調は、学会の発展のために<会員の拡充、学会事業の推進>と<研究の質の確保>という2つの課題をいかに、両立させていくか、という問題意識でした。

しかし、この両立というのは、そんなに簡単なものではありません。会員が大学教官中心の30～50名程度の小単位であった時代には問題が少なかったのですが、会員が増えれば、意識・関心が多様化するの、当然のことです。また、今日の教育現場の混迷を救うためにも、現場の生の声をお持ちの現職教員の会員を増やして、発言していただくのは、とても大切なことのように思います。

この難題を、何とか両立するための「装置・しかけ」として、従来からも話題にのぼっている、学会口頭発表における「課題研究」の問題(「自由研究」に対する)、学会出版物の多角化(例えば、日本教育方法学会のような2本立て)、部会活動再考、出前シンポの後に来るもの、などについて、討議されました。特に新企画として、夏期ミニ学会の開催(8月末予定)の実現方法が熱心に討議されました。

以上の全てが、総会で提案されることにはならないでしょうが、提案の背景となっている問題として知っておいていただきたいと考え、事前にお知らせした次第です。

その意味で、全会員が集まれる年1回の貴重な場である総会には、ぜひとも出席していただき、討議の場になることを期待しています。学会総会のセレモニー化は是非とも避けたいと思います。

事務局情報担当からの お知らせ

上山 浩(三重大学)

学会誌バックナンバー寄付のお願い

既にお知らせしましたように、学情センターの電子図書館に本学会の学会誌が部分的に登録されました。現在、電子図書館にて閲覧できるのは9号、10号、及び13号～18号です。

まだ登録されていない1号～8号及び11号、12号は、学情センターに送付できていません。これらは、一冊ずつは私の手元にありますが、一冊ずつしかないということで、学情センターから「一冊は恒に保管して置いてほしいので、受け取れない」とのことです。

そこで、学会員の皆様をお願いいたします。これらの欠号につきまして、もし、余分をお持ちでしたら寄付をお願いできないでしょうか。学情センターでのデータ化の作業には、コピーは不可とのことでした。学会誌は綴じを

解かれ高精度のスキャナーで読みとられるそうです。したがって、とても心苦しいのですが、ご寄付頂いた学会誌はお返しできません。

電子図書館に全ての号が収録されることの重要性は、指摘するまでもないことかと思えます。さらに、この学会誌のデータは本学会によりCD-ROMとして再出版することもできます。そうした場合、美術教育研究の利便性は少なからず向上すると思われれます。

あらためて寄付をお願いしたい号を確認します。

第1号(『大学美術科教育研究会報告』第4号までこの誌名)、第2号、第3号、第4号、第5号(1983)(この号より『美術教育学』)、第6号(1984)、第7号(1985)、第8号、第11号、第12号

どうか学会員の皆様のご協力をお願いいたします。ご寄付いただける号をお持ちの場合は、とりあえず、下記までご連絡下さい。

上山 浩
三重大学教育学部
〒514-0005 津市上浜町 1515
059-231-9280
E-mail:ueyama@edu.mie-u.ac.jp

公式学会ホームページの公開

学会公式ホームページが学情センター内サーバ(学会ホームビレッジ)にて公開されました。学情センターのホームページからたどることができます。

直接のURLは

<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/aae/Home.html>
となります。

ページの内容につきまして、今後もアップデートをしていきたいと思えます。ご意見をよろしくお願いいたします。

研究部会報告

「アミューズ・ヴィジョン 研究部会」報告

刈谷市美術館 松本育子

本研究部会は、美術館での美術教育の理論や実践に関する研究と、美術教育をめぐって美術と学校との連携を進めていくことを目的として1992年に発足した「アミューズ・ヴィジョン研究会」を母体として出発しました。これまでに20回の研究会と公開シンポジウム、公開研究会を各1回開催しています。メンバーは、愛知、三重、滋賀など東海地区を中心にした美術館学芸員と学校教員32名で構成されています。

今年度の部会は、ドキュメント2000プロジェクト（松下電器産業㈱等協賛）の支援を受けて当部会が制作したポケットミュージアムの活動を主に行いました。また、見学会、活動報告などの通常の例会以外に、昨年末には、平成10年度の教育普及事業の報告、自由な意見交換会とネットワークづくりをめざした公開研究会も開催しました。したがって、限られた紙面の関係上、ここでは、ポケットミュージアムの制作活動と公開研究会を中心に報告します。

ポケットミュージアムの制作活動について

ポケットミュージアムとは、小・中・高等学校の美術教育の現場で教員が利用することのできる、美術鑑賞教育用のパッケージ化した貸出用教材です。会員が互いのノウハウを提供しあい、当部会の研究成果を結実させるかたちで制作しました。学芸員会員が属する美術館の所蔵作品に即して、鑑賞に主眼をおいた授業を展開でき、実践が行えるよう配慮さ

れています。

ポケットミュージアムには、以下の内容をパッケージしました。

作品カード（76枚）
作品絵はがきをラミネートしたもの。
大型図版（5枚） A2版の大型図版。
OHPシート（5枚）
ティーチャーズガイド
年齢別に対応した4種類の授業展開例。
アート・ゲームの方法も紹介。
データブック
作品のデータ、用語解説などを掲載。
ポケットギャラリー
作品カードを綴り込んで掲示できるファイル。
ジクソーパズル
マルク・シャガール作「枝」（三重県立美術館蔵）のジクソーパズル。
かるた風文字カード
アート・ゲームで使用するかるたサイズの文字カード。
美麗ハードケース

昨年度からの継続活動であったポケットミュージアムも会員たちのかなりの努力によって昨年秋にやっと試作が完成しました。それを受けて、11月に三重県内の小学校で実践授業が行われ、指導案等の検討を行いました。全くの手作りで5セットが完成した今年の1月からは、実際に貸し出しを行っています。



ポケットミュージアムの内容

公開研究会について

昨年12月12日、名古屋市美術館講堂において、「美術館教育 '98 レポート アミューズ・ヴィジョン研究会・公開研究会」を開催しました。三重県立美術館、名古屋市美術館、静岡県立静岡南高校ほかで開催された教育普及活動についての9つの報告と参加者との意見交換会を行いました。事前に詳細な打ち合わせができないままライブ感あふれる状態で開催しましたが、予想を上回る多くの方々にご参加いただき、鑑賞教育に対する関心の高さを実感しました。

今回の研究会は、4月末頃開催する予定です

すが、子どもを対象とした中部圏の美術館ガイドブックの制作や鑑賞教育を目的とした展覧会の企画立案などが、今後の活動候補にあげられています。

研究部会に関するお問い合わせは、下記までお願いします。

【連絡先】

アミューズ・ヴィジョン研究部会事務局
〒448-0852 愛知県刈谷市住吉町4-5
刈谷市美術館 松本育子
TEL：0566-23-1636
FAX：0566-25-0511

隣国(中国)小学校との 「交流」について

宮脇 理 (元筑波大学)

中華人民共和国の現在が一国二制度の路程にあることは周知の通りですが、昨年10月、北京にて開催された美術教育の国際会議にて発表の途上、屢々瞥見するのが「共創」の文字です。共創は政治・経済のみではなく教育の「国家間交流」という立場においても進められています。この度、本学会においても「発表」されてきた銭初熹氏より、氏が勤務する華東師範大学の「芸術教育基地」として期待されている上海市東荷小学校(朱健樸校長)からの交流申し出として、「児童作品の交換展示」「児童・



東荷小学校授業風景

生徒のホームステイによる交流」などが銭氏を通し提案されました。

上海市の現在は、経済に限らず文化・社会全般に亘って海外との交流に活発な動きを見せています。

人口1,335万人の大都市上海は、40階建てのビル群が次々に建ち並び、中国の次世紀への意欲を見せていますし、学校教育も例外ではなく「伝統と未来」に気概を持ち、これを教育の主要な視野へ入れています。この際、隣国の様子をつの鏡として相対化することも必要かと思えます。身近なところから標記の試みをなさりたい方、ご関心のある方は是非とも交流を深めてはと思います。前述の銭初熹氏は日本語は堪能ですが、橋渡しをご希望なら私(宮脇)がいたします。下記に念のため銭氏の大学のアドレスを記しておきます。



銭氏と筆者

* 郵便 / 200062

中国・上海市中山北路3663号
華東師範大学

藝術教育系・美術教育研究室主任
銭初熹 様

「構成教育の史的研究 - イギリスの基礎デザイン運動: ビクター・パスモアとリチャード・ハミルトンの教育 - 」について

茂木一司 (鹿児島大学・群馬大学)

ここに紹介します『構成教育の史的研究』は、1998年1月に九州芸術工科大学博士課程芸術工学研究科視覚伝達専攻に課程修了論文として提出し受理されたものです。本論文の研究の動機は、私が学生時代に学んだ「構成もしくは構成教育」の問題点を現時点で総括し、造形美術教育における基礎を再検討しておきたいということから始めたものです。当時移転新設の筑波大学芸術専門学群構成専攻の第1回生として「造形の基礎(教育)を研究する専門が成立するのか?」という構成コースの存在意義を高山正喜久、朝倉直巳、横山智也の3人の教官を交えて熱く議論したことが自分の研究教育の原点になっています。議論は白熱しますが、いつも結論は曖昧なまま、わかったようでわからないという高山先生のことばで治められていました。私は自分なりに「構成」の基礎の基礎という性質を「教育性」と捉えて、その側面からアプローチしようと決めました。これ以降私の研究テーマは、「造形の基礎教育」をさまざまな観点から求めていく、つまり狭い専門性を深く追求するというよりも、いわば造形(教育)の世界を彷徨するような非常に広大なものになってしまいました。これは、論者の今までの約20年間の造形美術教育研究の多様さとして表れています。ルドルフ・シュタイナー(Rudolf Steiner, 1861-1925)の教育芸術、生涯学習、教師教育、障害児の造形教育、マルチメディア教育、そして基礎造形など、それらに共通するのは、

部分に対していつも全体的なことを問題にする観点であり、それを「構成」あるいは「構成教育」という名でまとめておきたいと思うようになったのです。「構成」あるいは「構成教育」ということばには、分かりにくいとよく言われます。しかし、それが持つ、一つの課題に対して、あらゆる角度から挑戦する、いわば自由で斬新で実験的な態度や(リチャード・ハミルトンがジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』から引用して作品化した)“Epiphany”(本質的意味の突然の顕現)にも似た直覚的な(intuitive)把握は、その一般的なフォーマリスティックで、感覚主義的な批判を越える力をさまざまな側面で有効性を保ち続けると、私は今も感じているからです。それは、今日の情報ネットワーク社会の中で生きていくために、ある面では冷静に、別の面では先進的に、そして調和的にならなければならないことと一致しています。ネットワーク上にぶら下がっている一人のユーザーが目に見えない相手のことを考えながら、データのやりとりをすることは、言ってみれば美と秩序の原則で実践される(これも一見そうは見えない)きわめて合理的な構成的世界の中の出来事です。

本研究の目的は、「構成」や「構成教育」を厳密に再定義するというよりは、「造形活動において基礎を考えたり、それを実践する理念や方法(意志や態度)」そしてそれを(人間が常にそうであるように)発展する存在として捉えながら考察しようすることです。以下簡単に概要を示します。

本論文は、1954年から66年までニューキャッスルのダーラム大学キングス・カレッジでビクター・パスモア(Victor Pasmore, 1908-)とリチャード・ハミルトン(Richard Hamilton, 1922-)によって設立、運営された基礎コースの発展を後づけたものである。ニューキャッスルのコースは、戦後のイギリスの美術教育思考を急速に現代化した基礎デザイン運動の一つのモデルであり、コールド

ストリーム・レポート(1961)による美術学校への基礎教育(前ディプロマ課程)の導入という制度的な支援を明確化した基礎デザイン運動の一つの「緩やかなモデル」を代表している。それはまた、伝統的に新しいものを拒否し続けてきたイギリスの美術をヨーロッパのモダニズムと統合する典型でもあって、同時に遅れてきたイギリスの美術教育を結果的に急速に現代化した。

本研究は、広義の美術教育における基礎教育、すなわち日本ではバウハウスの基礎教育を昭和の初期に導入した構成教育の歴史的展開という視点から検討したものである。わが国では昭和30年代以降のデザインの発展とも相まって、構成教育は小中学校の図工・美術教育からデザインを専門する各種学校や大学まで、幅広い造形の基礎教育として定着していった。しかし、この構成教育には平面・立体構成という題材に見られるように、その抽象的な練習が冷たく、子どもの生活感情を害するという批判、あるいはバウハウスやデ・ステールの焼き直しのものという評価がみられるが、これはイギリスの基礎デザイン教育においても共通する。現在の平面構成や立体構成がバウハウスで行われた基礎造形教育に較べて、固定化され、矮小化され、魅力のないものにされているのはなぜか。その主な理由は「構成教育」の本質的な問題にあるのではなく、それが制度として美術教育に持ち込まれる時、すなわち教育化された時に生じる問題である。固定化が生じるのは、教育自体が持つそのような性質にもよるが、指導者の力も大きいと思われる。したがって、研究の目的の一つに、美術家の芸術観がその教育にいかに関与するかを検討することをあげた。今回取り上げるパスモアもハミルトンも現役の芸術家であり、それが彼らの教育に深く関わっていたことは間違いない。つまり、彼らの新しいことに対する果敢な興味や関心が教育システムの改革を促すほど魅力に富んだ美術教育を生んだということもできる。そして、研究目的の二つ目は、戦後のイギリスの美術と教育と美術教育の現代化におけるそれぞれ

の関わり合い、三つ目にはバウハウスの影響は世界的なものであると言われるが果たしてそうなのかどうか、イギリスを事例に考えることである。

論文は三部から構成される。第一部は、基礎デザイン運動運動前史、すなわちバウハウスの教育方法や内容、特にイッテン、カンディンスキー、クレーの基礎教育及び彼らの教育のイギリス絵画への影響について検討した。第二部では「イギリスの基礎デザイン運動」に関わる基礎的な問題、特にパスモアとハミルトンの芸術活動を検討した。第三部では、「基礎デザイン教育の実際」として、リーズ校とニューキャッスル校が協力したスカーバラ・サマースクールの実践とニューキャッスル校の基礎デザイン教育の理念や方法、内容を具体的に検討した。



図1 パスモアの授業



図2 ハミルトンの授業

書評&文献紹介

『フランスの現代学校』

C・フレネ著 明治図書
と関連する文献・資料について

浜本昌宏（武蔵野女子大学）

我が国の現下における教育改革をめぐる、真に求められるものは、旧来からの教育制度の民主的見直しと同時に、教育そのものの在り方や内実の抜本的な検討をくぐる事であろう。そうした課題に応え、多くの示唆を与えてくれる文献の一つとしてこれを選んだ。初版本は1964年のものであるが、文字どおり「現代」に息衝く〈実践の教育学〉と云える内容である。著者であるC・フレネは、1966年にすでに没しているが、氏の意志を多くの教育関係者が受け継ぎ、フランスはもとより我が国でも、幾つかの学校現場で創造的に実践し発展させているところに今日性があると云えよう。そもそもの教育の立場は、J・ルソーの教育観に始まる子どもを学びと発達の主体とする実践であり、19世紀初頭に立ち上がった〈進歩主義教育運動〉等の教育改革思想の強い影響を受け、自らの献身的な努力と子どもと共に創り上げていった、生活のある学校と教育づくりに特徴がある。したがって、そこでの理論はモンテッソーリ等にみられる独自の方式や教条を固定化したものと違って、教育を生きたものとして考え、常に創り出す立場を貫いているところに、優れて普遍性と現代性を持つ。

C・フレネは「私たちは組立て式の人間をつくるのではなく、生きたダイナミックな人間をつくっていくのである」と述べているように、ここでは一斉画一授業を徹底的に排し、子どもたちの興味・関心を尊重し、また相互に支え合い高まる主体的探求と表現活動に目を見張るものがある。事実、子どもたちの研究と表現の輝く成果は無数であり、その中から選ばれた子どもの手になる研究冊子は、教材や学習資料とし

て役立っており、「BT」という名称ですでに千数百種類もが出版されていると聞く。

これ一つ取り上げても驚きである。また子どもの美術に関する興味深い専門雑誌「Art Enfantin」も教育運動のなかで発行されている。フレネ教育が、上記のような現在に辿りつくまでの苦難と闘いに充ちた経過が、この本では順を追って記されており分かりやすい。たしかにフレネ学校を尋ねてみて、子どもたちのはずむ姿と内から湧き出る笑顔の自然さが印象的である。こうした教育の事実は当然のように教育学の研究対象になり、実践上の参考にもなる。すでに我が国でもフレネ教育をめぐる関連図書が増えている。例えば、『フレネ教育法に学ぶ』フレネ教育研究会・黎明書房、『学校にもっと自由を』村上義雄・朝日新聞社、『生活表現と個性化教育』佐藤広和・青木書房、『手仕事を学校へ』宮ヶ谷徳三・黎明書房、『子どものしごと』若狭蔵之助・青木書房、『生活から学びへ』佐伯絆・青木書房、『教室を変える』田中仁一郎・青木書房など。

尚この他に、フレネ学校の教育と子どもの様子をリアルに撮影した、極めて有益な教材としても使えるビデオテープがあり、3500円を送る事で入手出来る。申し込みは、東京都保谷市北町5-9-33 フレネ教育研究会 田中仁一郎宛て。



C. フレネのBT

Mail Box

このコーナーでは、会員の方々からの便りを掲載します。学会や美術教育に関するご意見等をお寄せください。

パリからの雑感

小澤 基弘（埼玉大学）

現在私は、文化庁芸術家在外研修員としてパリに1年間の予定で滞在しています。研修生活はこの2月で5ヶ月目を迎えることとなります。パリのエコール・デ・ボザールで、プロフェスール・アン・スタージュ（教授研修）をしております。ここにはフランスを中心に世界から学生が美術を学びに来ています。私が研修を始めたのは新学期の昨年10月からでした。この時期、新入生は図書館に通いつめて、この教官がどのような仕事をしているのか自ら確かめ（図書館には教官の作品集がずらりと並んでいます）お目当ての教官のところへ自作を持っていったら、その教官と徹底的に議論し、自分に相応しいアトリエを選ぶという、いわばアトリエ選択の大切な時期なのです。学生はまず、自作をどのように教官に見せるのか、そのプレゼンから工夫し、自分が何を表したいのか饒舌なぐらい語り、そして教官の質問に対して自信満々に答える、そんな光景を幾度か目にして、それがまず私にとっては大きなカルチャー・ショックでした。「語る」ということのもつ力と意味を、彼らは存分に活かしているのです。作品自体は、まだまだ未熟なものが多いのですが、自分がこれから何をしようとしているのか、その先をしっかりと見据えている、そんな感じです。アカデミックな技術という点では、むしろ日本の美術系の学生の方が数段身に付けていると感じますが、「表現」とは何か、その本質的な意味を彼らは何よりも先に思索しようとしているという印象を強く受けました。それゆえに、技術的に未熟に見えても、作品は内側

に強烈なエネルギーを秘めているという感じでした。そしてその表現方法も実に多様です。

パリ市内でのエクスポジションでも、やはり日本のそれとは異なったコンセプトを感じる事が多々あります。国立図書館で行われた「シエル(空)」と「テール(地)」というエクスポ、これはこの二つの主題をこれまで人間がどのように解明しようとアプローチしてきたのか、つまり主観的でイマジナティブなアプローチと、客観的で科学的なそれを、見事に融合させて提示するというもので、私には実に新鮮でした。つまり展覧会の企画者の意図と思想ががひしひしと伝わってくるのです。

この二つの例を通して私が言いたいことは、こちらでは美術を人間の思索の一表出としてしっかりと位置づけているということです。つまり表層の技法とか技術などよりも、その中にいかなる思想を込めるか、そちらの方に極めて大きなウェイトを置いているということなのです。そこにはそれを語る「言葉」があり、「論理」があります。芸術家の小さなサロンでも、そこには哲学者がいたり、音楽家がいたり、建築家がいたりする、そして彼らはお互いに自分を名乗ることも忘れて、その場の議論に熱中する、そういう場面にも幾度が遭遇しました。日本の美術の世界（教育を含めて）は、あまりに狭すぎると感じます。分野を越えて語り合い、議論し合う場というものが皆無だと思えます。それはおそらく、制作者が自作を語る言葉を持たないが故ではないかと思うのです。作品さえ作ってあればよいという姿勢を、今後日本の制作者はまずもって改めねばならないのではないのでしょうか。制作者が語る言葉を持つということは、まさにどうそれを教えるかに直結します。今後日本の美術教育はどんな形であれ、必ず体系化されねばならないと思えます。それが一面的なものになろうとも、偏ったものになろうとも、多くの制作者あるいは教育者の体系化・構造化へ向けての試行錯誤自体が、必ずいつの日か一つの真なる美術教育体系へと収斂していくはずです。パリに住んで5ヶ月、自分の言葉の無さ、思想の浅さを痛感している今日この頃です。

情報コーナー

情報コーナーへの情報提供のお願い

このコーナーでは、会員に関する情報（出版、異動、住所変更、受賞などの情報を随時掲載します。情報検索の時間的条件と情報提供の公平さを考慮し、掲載内容については自己申告を原則とします。

掲載を希望される方は、掲載を希望する情報を事務局通信担当（宇田）又は通信世話人（新井）宛に、E-mail、FAX 等でお知らせ下さい。

投稿のお願い

通信の各コーナー（「書評・文献紹介」「Mail Box」「研究ノート/実践報告」等）への投稿

を随時受け付けています。

原稿は、1 ページ当たり 20 字 × 88 行（表題、著者名 10 行分を含む）にまとめ、E-mail 又は郵送（できるだけワープロ原稿でお願いします）で、事務局通信担当（宇田）又は学会通信世話人（新井）まで。写真等の図版も掲載可能です。

第22回美術科教育学会兵庫大会について

* 会期 平成12(2000)年3月27日(月),28日(火),29日(水)

* 会場 兵庫教育大学 〒673-1415
兵庫県加東郡社町下久米 942-1

* 大会事務局（は大会会長）

辻田嘉邦 TEL:0795-44-2253(研究室直通)

福本謹一 TEL:0795-44-2255(研究室直通)

芸術系事務局 TEL:0795-44-2253

FAX:0795-44-2259

春風や鬪志抱きて丘に立つ（虚子）

早や外套も重い季節となり、春色俄に動き始めました。あちこちで、卒業式が行われ、旅立ちの季節です。

学会発表に向けて、鬪志を抱き立ち向かっておられる方も多いのではないのでしょうか。通信第32号は、3月26日～28日に開催される学会福島大会の直前号として、お届けしました。口頭発表のほか、プレ学会からの継続企画である「美術教育のリアリティの再生」、認知科学からのアプローチとしての宮崎清孝氏の講演など、盛りだくさんで、今から楽しみです。

福島大スタッフの方々にとっては、1年余にわたる準備の追い込みの時期かと思われます。疲労の方もピークに達していると思いますが、風邪など、めされぬよう御自愛下さい。

新体制での通信3回目となります。前号では、新井理事を中心とする企画頁の充実比べ、事務局が担当する頁がほとんどなく、御批判をいただきました。その反省を生かし、今回は、「科研費採択状況」「総務会からの報告と、議論の基調」「情報担当からのお知らせ」を事務局頁として掲載しました。

編集後記

総務会での議題の一部は、学会会期中の役員会や総会で提案されるわけですが、その基調(学会の抱える問題や事務局の意識)を事前にお知らせすることにより、討議が活発に行われることを期しています。

総務会・役員会への要望、通信の企画・内容・レイアウトなどに関する感想、批判並びに学会通信への投稿がありましたら、下記までお寄せ下さい。(1頁当たり 20字 × 88行)

* 宇田秀士(事務局通信担当)

通信1頁目のタイトル下の住所、TEL&FAX 又は、
E-mail: udah@nara-edu.ac.jp

* 新井哲夫(通信世話人)

〒371-8510 前橋市荒牧町4-2

群馬大学教育学部

TEL&FAX 027-220-7316(研究室直通)

E-mail: arai@edu.gunma-u.ac.jp

次号は、新年度に入った6月発行の予定です。事務局よりの決算・予算報告、学会誌第21号の最終締切に関する情報(論文は、年間を通じて受け付けています。今送っていただいてもかまいません。)担当理事による企画頁を掲載いたします。それでは、また、福島で。(宇田)